

目指す学校像

# 高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 23 (R元. 10. 25発行) 文責 校長 福田雅也

## 「負けるな うそを言うな いじめるな」

昨年さくねんのNHK大河ドラマ「西郷どん」はご覧たいがになったでしょうか。私は、放送開始後何度かは見たのですが、数回見逃してしまっせごたことで、あきらめてしまいしばらく見ていませんでした。しかし、ある講演会らんをきっかけに、再度見るようになり、最終回まで見逃しませんでした。

その講演会とは、「西郷どん」の時代考証をされていた原口泉わたしさんの講演会でした。原口さんは、講演会時、志学館大学教授、鹿児島県立図書館長等をされていましたが、主に鹿児島大学で教鞭を執られ、これまでも多くの大河ドラマ等の時代考証をされたそうです。教員対象の講演会でしたので、演題は「西郷家の子ども教育 ～負けるな うそを言うな いじめるな～」でした。

演題は西郷家の子ども教育となっていましたほうそうかいが、内容としては西郷家というよりも薩摩藩の教育制度である「郷中（ごじゅう）教育」についてが中心でした。副題「負けるな うそを言うな いじめるな」も「郷中教育」の中で最も重んじられたことだそうです。ちなみに、「いじめるな」には「弱い者を」を付け加えてあることが多く、それぞれは次のように解釈されているようです。

「負けるな」…人に負けないというよりも、どんな困難に遭っても決して自分に負けてあきらめないこと。

「うそを言うな」…過ちを犯したときには決して言い訳せず、素直に非を受け入れること。

「弱い者をいじめるな」…弱い者いじめが最も卑劣で、器の小さい人間のすることだから慎むこと。

「郷中教育」では、青少年を「稚児（ちご）」と「二才（にせ）」に分け、勉学・武芸などを通して、一人一人の能力を最大限に発揮させました。原口さんは郷中教育を次のような表現で説明されています。「芋をおけに入れて棒でかき回すことを『芋こじ』と言いますが、芋と芋は互いにぶつかり合い、汚れはきれいに落ちます。同じように、郷中教育は、子どもたちが互いに切磋琢磨する集団教育であり、人材教育です。」

また、郷中教育はもちろん、薩摩藩の家庭教育で基礎となったのが「日新公（じっしんこう）いろは歌」だそうです。「日新公」と慕われた島津忠良（戦国時代の薩摩藩主）が、人の道を分かりやすく教えるために歌の形にしたもので、薩摩藩士の精神性の根幹であり、誰もがそらんじることができたそうです。

代表的な歌としては、次のような歌があります。

・「いにしへの道を聞きても唱へても わが行にせずばかひなし」…昔の賢者の立派な教えや学問も口に唱えるだけでは、役に立たない。実践、実行することがもっとも大事である。

・「楼のうえもはにふの小屋も住む人の 心こそは高き卑しき」…どんなに立派な家に住む人も貧しい小屋に住む人も、心が清く正しければ高貴であり、そうでなければ卑しい。人の真価は、心の在り方で決まる。地位や立場ではない。

このような道徳的な内容のいろは歌を、封建制度では頂点の立場である、戦国時代の殿様が示していることに素晴らしい価値を感じるのには私だけでしょうか。

これらの教育を受けた西郷どんは、同様の教育で育った大久保利通らとともに、明治維新を成し遂げることになるのです。

これらのことから、今の時代に郷中教育を手本にしようとか、偉人を輩出しようと言いたいのでは、もちろんありません。講演会の内容のほんの一部をお知らせしたかったのと、私自身が感じたこと、「いつの時代も、普遍的に変化せず誰かが大切だと思えることがあるということ」「そして、その事は人と人との繋がりの中でしか身に付けることはできないということ」、そんなことをお伝えしたくて、今回の学校だよりは発行しました。